

公的医療機関等2025プラン

平成29年 9月 策定



日本赤十字社

高山赤十字病院

目 次

I 高山赤十字病院の基本情報	2
II 構想区域の現状と課題	
1 構想区域の現状	4
2 構想区域の課題	6
III 高山赤十字病院の現状と課題	
1 基本理念	7
2 自施設の状況	7
(1) 職員数の推移	7
(2) 患者数等の推移	8
(3) 各病床機能の実態	8
(4) 入院患者の年齢層と退院先	9
(5) 地域連携の実態	9
(6) 医療安全及び感染症対策	10
(7) D P C データからみた当院の現状と役割	11
(8) 5 疾病 5 事業からみる当院の現状	12
3 自施設の課題	15
IV 今後の方針	
1 地域において今後担うべき役割	16
2 今後持つべき病床機能	16
3 その他見直すべき点	16
V 具体的な計画	
1 4 機能ごとの病床のあり方について	17
2 診療科の見直しについて	18
3 その他の数値目標について	18
VI その他	18

I 高山赤十字病院の基本情報

医療機関名	高山赤十字病院
開設主体	日本赤十字社
所在地	岐阜県高山市天満町3丁目11番地

許可病床数	476 床 (平成 29 年 7 月 1 日)	
(病床の種別)	一般	476 床
	療養	0 床
	結核	0 床
	精神	0 床
	感染症	0 床
(病床機能別)	高度急性期	16 床
	急性期	353 床
	回復期	107 床
	慢性期	0 床
	休床等	0 床

稼働病床数	395 床 (平成 29 年 7 月 1 日)	
(病床の種別)	一般	395 床
	療養	0 床
	結核	0 床
	精神	0 床
	感染症	0 床
(病床機能別)	高度急性期	16 床
	急性期	286 床
	回復期	93 床
	慢性期	0 床

診療科目 (標榜診療科)
内科、呼吸器科、消化器科、血液内科、循環器内科、精神科、小児科、外科、整形外科、脳神経外科、産婦人科、泌尿器科、皮膚科、眼科、耳鼻咽喉科、放射線科、リハビリテーション科、麻酔科、歯科口腔外科、病理診断科 計 20 診療科

(単位：人)

職員数 (平成 29 年 4 月 1 日)					
	職員数	医師 (研修医除く)	看護職員	専門職	事務職員
常勤職員数 (正職員及び嘱託職員)	584	65	346	103	70
非常勤職員数	88	21	47	6	14
常勤換算数	640.0	67.8	383.2	106.3	82.7

注)：介護老人保健施設はなさとの職員数を除く

認定・指定等
<p>【病床数及び機能】 476 床 (救命救急センター、未熟児センター、回復期リハビリテーション病棟、地域包括ケア病棟)</p> <p>【機関指定】 救急告示病院、災害拠点病院、地域医療支援病院、エイズ治療拠点病院、 地域周産期母子医療センター、地域がん診療拠点病院、へき地医療拠点病院、 臓器提供施設、小児救急医療拠点病院、DPC 病院Ⅲ群</p> <p>【教育・認定等】 臨床修練指定病院 (医科、歯科)、外国医師又は外国歯科医師臨床修練指定病院、 地域医療研修センター、病院機能評価 3rdG (一般病院 2)</p> <p>【特殊機能】 人工腎センター、健診センター、外来点滴室、助産師外来</p> <p>【付帯施設】 介護老人保健施設、居宅介護支援事業所</p> <p>【高度医療機器】 64 列マルチスライス CT、16 列マルチスライス CT、MRI 装置、放射線治療システム、 循環器系 X 線診断装置、乳房 X 線撮影装置、消化器 X 線 TV システム、 血管造影 X 線撮影装置</p> <p>【届出施設基準 (抜粋)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一般病棟入院基本料 (7 対 1)、救命救急入院料 1、小児入院医療管理料 4、 回復期リハビリテーション入院料 2、地域包括ケア病棟入院料 1 ・医療安全対策加算 1、感染症対策加算 1、患者サポート体制加算

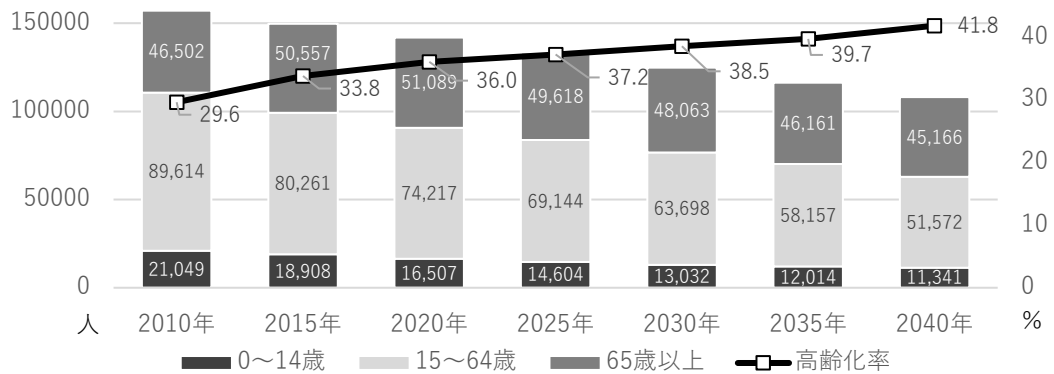
II 構想区域の現状と課題

1 構想区域の現状

(1) 区域の概要

構想区域である飛騨圏域は、高山市、飛騨市、下呂市及び大野郡白川村からなり、総面積は約 4,178 km²で、岐阜県の面積の約 4 割を占める。3 市 1 郡 (1 村) で構成され、約 14 万 9 千人の人口を有しているが、岐阜県の総人口の約 7%程度であり、人口は 2015 年から 2025 年までに約 1 割が減少する見込みである。15 歳から 64 歳までの生産年齢人口の減少が進むことから、2025 年には高齢化率 37%を超えることが見込まれている。

■飛騨圏域の人口推移と高齢化率



【出典：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」、高齢化率：65歳以上の人口÷総人口】

(2) 区域の医療体制

飛騨圏域は、広大な面積を占めるが、200 床を超える病院は高山赤十字病院 (476 床)、久美愛厚生病院 (300 床) 及び県立下呂温泉病院 (206 床) の 3 院のみであり、周辺地域の中核病院として、飛騨北部に飛騨市民病院、飛騨南部に下呂市立金山病院がその地域の急性期医療を支えている。多くのへき地が存在しているが、22 か所のへき地診療所がその地域の医療を担っており、さらに当院がそれを支えている。

■高山赤十字病院からみた医療施設の地理的状況



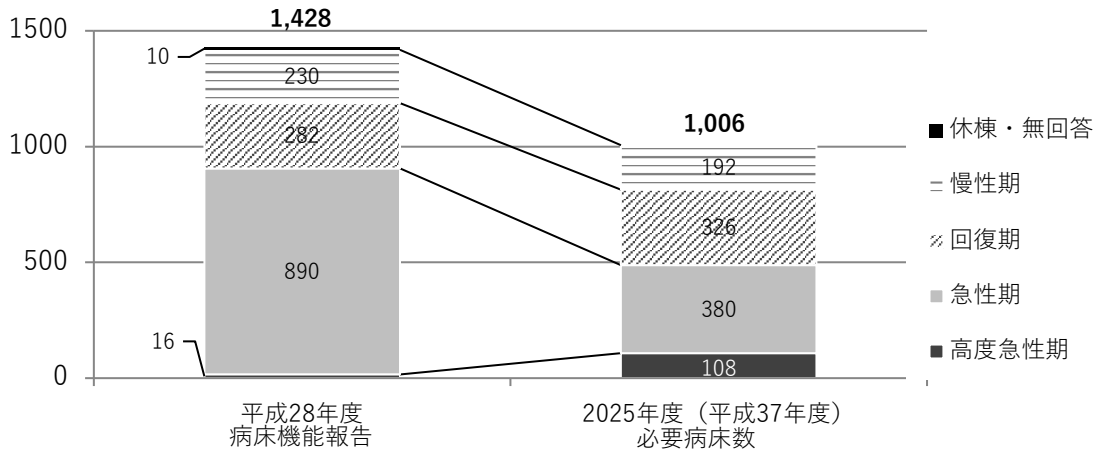
【出典：岐阜県地域医療構想、図は高山赤十字病院調】

(3) 区域の病床数

平成 28 年度病床機能報告における圏域の病床数は 1,428 床であり、全体の約 6 割が急性期病床である。2025 年（平成 37 年度）における必要病床数は 1,006 床と推計されており、全体で約 400 床の病床が過剰となる見込みである。一方で、高度急性期病床は約 90 床、回復期病床は約 40 床が不足することが見込まれる。

■ 飛騨圏域における病床数の現状と必要数

(単位：床)



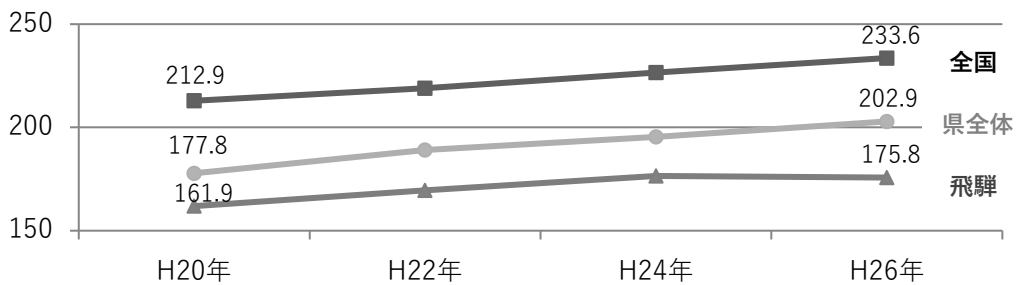
【出典：平成 28 年度病床機能報告結果（岐阜県）、岐阜県地域医療構想】

(4) 区域の医師数等

飛騨圏域における人口 10 万人当たりの医師数は横ばい傾向であるが、県全体及び全国の人口 10 万人当たりの医師数を大幅に下回っている。また、平成 26 年における小児科医師数、産科・産婦人科医師数、歯科医師数及び薬剤師数も県全体及び全国より下回っている。

■ 医療施設従事医師数（人口 10 万人当たり）

(単位：人)



【出典：岐阜県地域医療構想】

■ 小児科、産婦人科医師数等（人口 10 万人当たり：平成 26 年）

(単位：人)

	全国	県全体	飛騨圏域	飛騨圏域と全国の差	飛騨圏域と県全体の差
小児科医師数	103.2	86.1	51.1	▲52.1	▲35.0
産科・産婦人科医師数	42.2	39.9	34.9	▲7.3	▲5.0
歯科医師	79.4	78.0	48.9	▲30.5	▲29.1
薬剤師	170.0	151.8	132.2	▲37.8	▲19.6

【出典：医師・歯科医師・薬剤師調査（厚生労働省）】

(5) 区域の介護体制

介護保険の被保険者における要介護（要支援）認定者は 2015 年（平成 27 年）からの 10 年間で約 22%増加すると推計される。また、介護給付等対象サービスの見込量は 2025 年までに居宅サービス、地域密着サービス及び施設サービスにおいて増加すると推計される。

■要介護（要支援）認定者数の推計（飛騨圏域） (単位：人)

	推計値				H27→H37 伸び率
	H27年	H28年	H29年	H37年	
要介護認（要支援）認定者数	9,047	9,357	9,677	11,064	22.3%

■居宅、地域密着型及び施設サービス量の推計（飛騨圏域） (単位：人)

	推計値				H27→H37 伸び率
	H27年	H28年	H29年	H37年	
居宅サービス	74,505	71,132	75,341	96,164	29.1%
地域密着型サービス	2,194	7,102	7,409	9,870	349.9%
施設サービス	1,846	1,888	1,907	2,051	11.1%

【出典：岐阜県地域医療構想】

2 構想区域の課題

(1) 医療提供体制に関する課題

将来あるべき医療提供体制を実現するため、各医療機関における適正な役割分担、病床規模の適正化及び経営基盤の効率化に向けた検討が必要である。また、圏域の北部、南部の地域においては、中心にある高山市まで車で 1 時間以上の時間を要することもあり、他圏域及び県外との連携を視野に入れた各医療機能の調整等が必要である。

(2) 医師不足に関する課題

飛騨圏域は広大であり、多くのへき地診療所を抱えていることから、拠点となる病院とへき地医療の維持の観点からも医師の確保が必要である。また、医師不足が特に顕著な診療科のうち、小児科及び産婦人科の医師が減少しており、分娩ができる医療機関も限られていることから、安心してお産ができ、子どもが育てられる体制の維持が必要である。

(3) 介護体制に関する課題

飛騨圏域における要介護（要支援）認定者数は増加することから、これに合わせて増加する医療及び介護ニーズの受入態勢を整備する必要がある。医師以外の医療・介護従事者も不足しており、年齢層も高くなる傾向があることから、特に在宅医療を推進していくためには、医師、看護師及び薬剤師のみならず、介護職員等の確保も必要である。

Ⅲ 高山赤十字病院の現状と課題

1 基本理念

基本理念
高山赤十字病院は、人道、博愛、奉仕の赤十字精神に則り、飛騨地域の急性期医療、高度医療に貢献し、安全でより良い医療を提供します。
基本方針
<ol style="list-style-type: none"> 1.高度で、安全な急性期医療の充実に努める。 2.十分な説明と同意に基づく医療を行う。 3.療養環境を整え、患者さんの満足度の向上を目指す。 4.すべての医療従事者を確保し、医療の質の向上に努め、チーム医療を行う。 5.医療を円滑に行うための医療、介護、福祉機関と連携する。 6.地域がん診療連携拠点病院としての充実に図る。 7.生活習慣病の診断、治療の質の向上を図る。 8.災害時の医療を円滑に遂行する。 9.職員が十分に職責を果たすことができるよう、労働環境を整える。 10.健全経営を保ち、飛騨地域の中核病院としての機能を維持する。

2 自施設の状況

(1) 職員数の推移

常勤医師及び研修医は増加傾向である。薬剤師、放射線技師及び臨床検査技師などの専門職も増加傾向である。また、職員数の増加に合わせて、医業収益に占める人件費率も年々増加傾向であるが、職員の年齢層が高くなっていることも要因の一つと考えられる。

■当院における職員数の推移（4月1日時点） （単位：人）

	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度
医師	54	52	58	60	62
非常勤医師	24	25	26	26	25
研修医	10	12	12	14	15
看護師	298	312	334	340	320
専門職	91	89	93	98	104
事務職	59	63	80	78	72
合計	536	553	603	616	598

【出典：高山赤十字病院調】

■医業収益に占める人件費の割合

	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度
医業収益（千円）	9,072,478	8,872,160	9,082,039	9,189,592	9,006,560
対医業収益人件費率（%）	55.1	57.0	57.1	57.4	58.0

【出典：高山赤十字病院調】

注）：対医業収益人件費率＝給与費÷医業収益

(2) 患者数等の推移

新入院患者数はほぼ横ばいであるが、入院患者延数が減少しており、平均在院日数も短縮傾向である。新外来患者数は減少傾向であるが、外来患者延数は横ばい傾向である。病床稼働率はやや減少傾向であるが、概ね 80% 台を推移している。

■当院における患者数等の推移

	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	H28 年度
新入院患者数 (人)	8,379	8,336	8,476	8,599	8,226
入院延患者数 (人)	122,897	117,349	118,608	117,574	113,759
新外来患者数 (人)	20,883	22,006	18,928	16,950	16,205
外来延患者数 (人)	203,124	194,139	195,791	207,178	225,377
病床稼働率 (%)	85.2	81.4	82.3	81.5	78.9
平均在院日数 (日)	14.7	14.1	13.0	12.7	12.9

【出典：高山赤十字病院調】

注)：H27.12 より、外来患者延数に他科受診のリハビリ患者数が計上されている。

注)：病床稼働率…(入院患者延数)÷(病床稼働数×365 日)

注)：平均在院日数…(過去 1 年間の在院患者延日数)÷((過去 1 年間の新入院患者数)+過去 1 年間の新退院患者数)÷2)

(3) 各病床機能の実態

平成 28 年度において、当院の高度急性期の病床稼働率は約 70% であり、急性期の病床稼働率は約 80% である。回復期の病床は回復期リハビリテーション病棟及び地域包括ケア病棟の 2 つがあるが、それぞれ病床稼働率は 70% 台である。

■当院における各病床機能の実態 (平成 28 年度)

	入院患者延数 (人)	平均在院日数 (日)	病床稼働率 (%)
高度急性期 16 床 (救命救急入院料 1)	4,078	6.6	69.8
急性期 286 床 (7 対 1 入院基本料)	84,191	10.9	80.7
回復期 45 床 (回復期リハビリテーション病棟入院料 2)	12,059	33.2	73.4
回復期 48 床 (地域包括ケア病棟入院料 1)	13,431	17.8	76.7

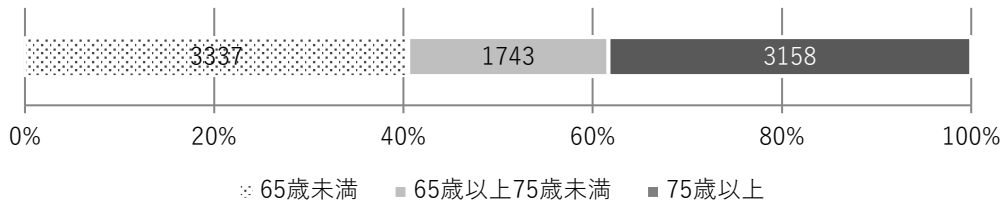
【出典：高山赤十字病院調】

注)：平均在院日数は、施設基準の要件によるもの日数

(4) 入院患者の年齢層と退院先

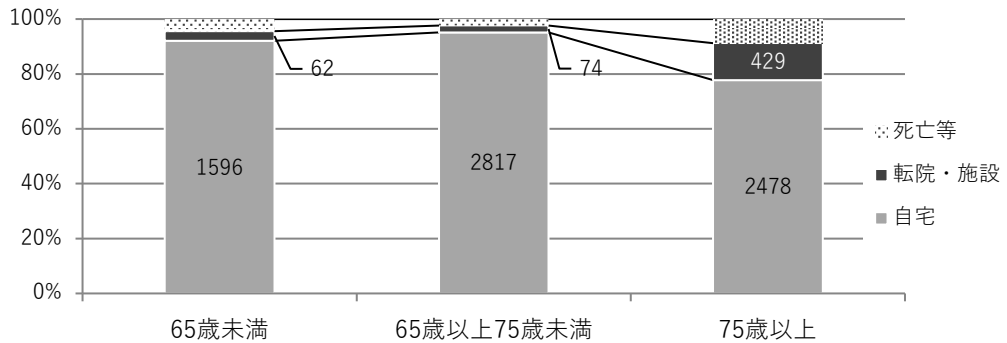
当院における入院患者の約 6 割が 65 歳以上の高齢者であり、特に 75 歳以上の高齢者が約 4 割を占める。また、各年齢層において自宅への退院割合が高いが、75 歳以上の高齢者では施設への退院割合が高くなっている。

■当院における入院患者の年齢構成（平成 28 年度） (単位：人)



【出典：高山赤十字病院調】

■当院における入院患者の退院先（平成 28 年度） (単位：人)



【出典：高山赤十字病院調】

(5) 地域連携の実態

①紹介率及び逆紹介率

地域医療支援病院として地域の医療機関との連携を密にし、紹介患者の受け入れなどを行っている。紹介率及び逆紹介率ともに上昇傾向である。

■当院における紹介率及び逆紹介率の推移 (単位：%)

	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	H28 年度
紹介率	63.6	63.3	59.2	64.9	68.2
逆紹介率	45.7	48.1	73.0	76.0	73.1

【出典：高山赤十字病院調】

②地域医療連携検討委員会の設置

地域の医療機関及び学識経験者等から構成される地域医療連携検討委員会を設置し、当院の地域連携における現状や課題等について検討を行っている。(年 4 回)

■外部委員

高山市医師会、飛騨市医師会、下呂市医師会、高山歯科医師会、高山市薬剤師会、久美愛厚生病院、飛騨市民病院、下呂市小坂診療所、岐阜県飛騨保健所、高山市、飛騨市、下呂市、高山市社会福祉協議会、高山市町内会連絡協議会 (14 団体)

③共同利用及び地域連携パスの実施

地域医療支援として、医療機器や入院設備などの共同利用ができる体制を整備し、調整を行っている。また、脳卒中再発予防パスやがん連携パスを交付し、地域の医療連携機関と切れ目のない医療の提供を支援している。

■共同利用及びパスの実施件数 (単位：件)

	開放病床	医療機器	図書研究室	脳卒中再発 予防パス	がん連携パス
平成 28 年度	3	595	33	155	24

④地域医療連携 IT システムの整備

平成 29 年 2 月より「ぎふ清流ネット」を活用し、患者の同意を得られた場合に限り、地域の医療機関に対して当院の診療情報を公開している。また、当院から岐阜圏域の病院へ紹介した患者の診療情報を閲覧できる体制を構築している。

■閲覧可能な医療機関 (平成 29 年 3 月時点)

岐阜県総合医療センター、岐阜市民病院、長良医療センター、村上記念病院、松波総合病院、
県立多治見病院、岐阜赤十字病院

(6) 医療安全及び感染症対策

①医療安全について

医療安全への患者参加の重要性から、当院では平成 24 年 6 月 1 日より、大阪大学医学部附属病院と共同で「いろはうた」を病院全体で取り組んでいる。医療安全の 7 つのポイントを「いろはうた」を用いて患者説明を行うことにより、医療及び医療安全への患者参加を促進している。

・「いろはうた」の 7 つの句

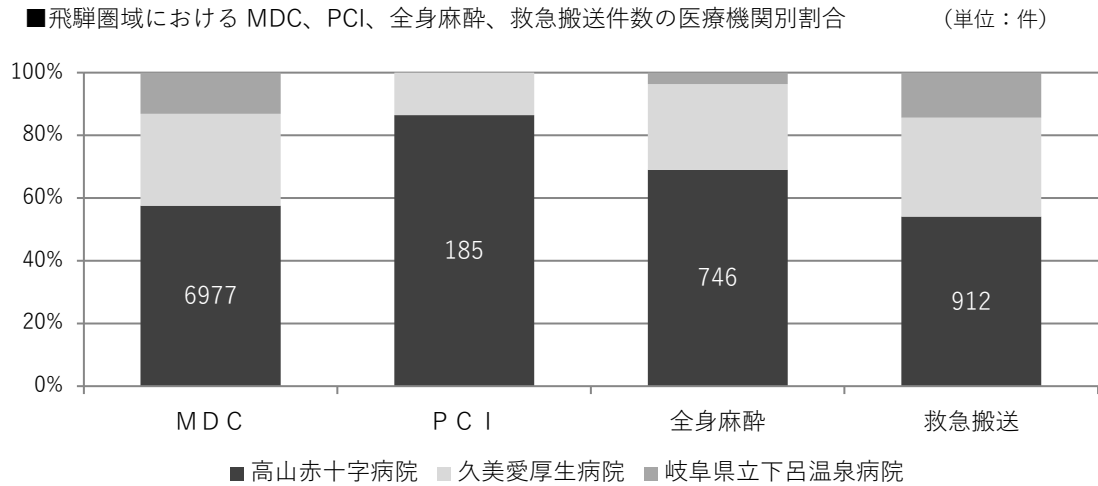
- い：今いちど 自分の名前を 伝えましょう 〈患者確認〉
- ろ：廊下は意外にすべります スリッパやめて 夜も安心 〈転倒予防〉
- は：歯は外したら 入れ物へ 大事な体の 一部です 〈代替不可用品の紛失予防〉
- に：二度 三度 たずねることも 遠慮なく 治療の主役は あなたです 〈自己決定〉
- ほ：ホッとすする 相手に話そう 不安な気持ち 〈信頼できる人への相談〉
- へ：変だな? と思った時は 確認を くすりは 正しく 飲みましょう 〈服薬管理〉
- と：ととっても 大切 次の診察 いつですか 〈自己管理〉

②感染症対策について

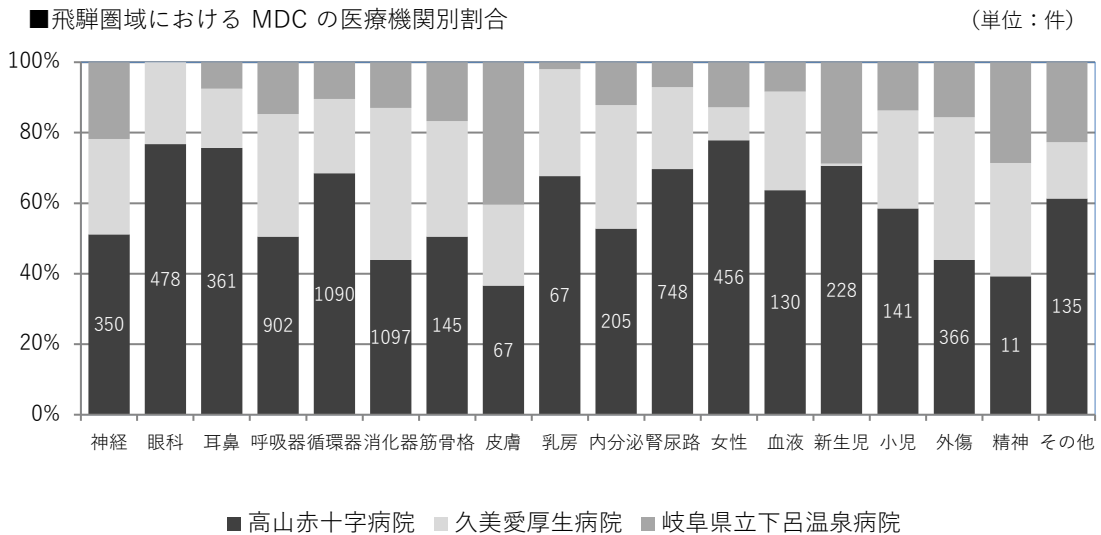
感染症対策については、院内感染防止委員会のもとに抗菌剤適正使用小委員会、感染対策チーム、結核小委員会等を設置し、医療関連感染制御に係る諸活動を実施している。感染管理部門には ICN (感染管理看護師) が専従配置され、薬剤師・臨床検査技師も関与し、各部門と連携の上、必要な対策を講じている。

(7) DPC データからみた当院の現状と役割

飛騨圏域の DPC 対象病院による MDC (診断群分類) におけるシェアは、高山赤十字病院が 6 割弱を占め、PCI、全身麻酔の手術等の実施率は高く、救急搬送においても約半数以上が高山赤十字病院に搬送されている。また、ほぼ全ての領域について、高山赤十字病院の占める割合が高い。



【出典：平成 28 年度第 4 回 診療報酬調査専門組織・DPC 評価分科会資料】



【出典：平成 28 年度第 4 回 診療報酬調査専門組織・DPC 評価分科会資料】

(8) 5 疾病 5 事業からみる当院の現状

①がんに係る医療

地域がん診療拠点病院として、化学療法及び放射線治療などの高度医療を提供している。外来がん患者数、放射線治療患者数ともに年々増加している。

■当院におけるがん患者等の推移 (単位：人)

	H25 年	H26 年	H27 年
年間新入院がん患者数	1,224	1,357	1,249
年間新外来がん患者数	16,348	18,887	20,836
放射線治療延患者数	87	134	196
化学療法延患者数	1,624	1,800	1,547

【出典：地域がん診療拠点病院現況報告より】

②脳卒中に係る医療

脳卒中疾患患者数はほぼ横ばい傾向であり、急性期の脳卒中に対して T-PA（血栓溶解療法）を実施している。

■当院における脳卒中患者等の推移

	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	H28 年度
脳卒中疾患（人）	288	238	243	269	255
T-PA 実施件数（件）	13	14	11	17	11

【出典：高山赤十字病院調】

③急性心筋梗塞等に係る医療

当院における心筋梗塞等の疾患は増加傾向であり、検査等の実施件数も増加している。また、24 時間体制で心臓血管カテーテル治療を実施できる体制を整備している。

■当院における急性心筋梗塞等の治療等の推移 (単位：件)

	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	H28 年度
心臓カテーテル法（検査）	640	725	800	856	846
経皮的冠動脈形成術	60	53	47	41	43
経皮的冠動脈ステント治療術	187	185	224	224	208
経皮的冠動脈血栓吸引術	12	8	6	4	4

【出典：高山赤十字病院調】

④糖尿病に係る医療

糖尿病による入院患者、教育入院が必要な患者が増加している。また、健康相談等を実施し、予防への支援も行っている。

■当院における糖尿病患者等の推移

	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	H28 年度
糖尿病入院患者数（人）	305	433	482	608	551
糖尿病教育入院（件）	11	17	13	21	10
健康指導数（回）	622	852	819	959	1,140

【出典：高山赤十字病院調】

⑤救急医療

飛騨圏域唯一の第三次医療機関であり、救命救急センター（16床）を有している。救急搬送及び救急外来受診患者は横ばい傾向であり、地域ニーズに合わせた運用を行っている。

■当院における救命救急センターの現状（平成27年度より20床から16床に減床している）

	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度
入院患者数（人）	976	1,004	1,023	974	821
病床稼働率（%）	69.0	67.8	65.7	77.4	69.8
救急搬送（件）	2,841	2,930	2,877	2,852	2,863
救急外来受診（人）	16,285	16,653	16,429	16,739	15,932

【出典：高山赤十字病院調】

⑥災害における医療

災害拠点病院として飛騨圏域における災害への対応とともに、赤十字活動の一環として救護班及びDMATの派遣、災害訓練を実施している。また、近年は特殊災害に対応したNBC（核・生物・化学兵器）訓練や夜間大規模訓練等も実施している。

■当院における救護班出動及び訓練実施の件数（単位：回）

	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度
救護班派遣実績	0	0	1	0	1
災害訓練実施	4	6	5	3	5
NBC訓練	0	0	1	2	1

【出典：高山赤十字病院調】

⑦へき地における医療

自治体によるへき地診療所への医師の派遣体制が構築されつつあることから、派遣回数は減少しているものの、必要に応じて、へき地医療拠点病院としてへき地診療所へ医師を派遣するとともに、へき地診療所の医師に対して研修等を通して医療技術の向上に取り組んでいる。また、別に飛騨市民病院と久美愛厚生病院の小児科に医師を派遣しており、古川病院には耳鼻科の医師を派遣している。

■当院におけるへき地診療所への派遣実績（単位：回）

	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度
派遣実績	99	96	54	16	4

【出典：高山赤十字病院調】

■当院における他院への派遣実績（単位：回）

	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度
飛騨市民病院（内科）	10	14	10	6	11
飛騨市民病院（小児科科）	44	41	42	45	46
古川病院（耳鼻科）	45	50	42	48	50
久美愛厚生病院（小児科）	6	83	143	128	149

【出典：高山赤十字病院調】

⑧周産期医療

当院の未熟児センターにおける入院患者数、病床稼働率は年々変動があるものの、医療依存度の高い重症心身障がい児の入院など、状況に応じた地域ニーズを担っている。また、近年、出産年齢の高齢化、不妊治療後の妊婦が増加しており、その結果、ハイリスク妊婦が増え、異常出産につながるケースもある。妊娠高血圧症・妊娠糖尿・てんかん等合併症のある出産は、内科・脳神経外科などと連携できる総合病院での出産が必要であり、飛騨地域内において、救命できた生命が多くあることから、当院の果たす役割は大きい。

■当院の未熟児センターの現状（10床）

	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	H28 年度
入院患者数（人）	152	123	119	146	141
病床稼働率（%）	44.7	29.4	36.4	29.8	29.1

【出典：高山赤十字病院調】

■当院における分娩件数の推移

（単位：件）

	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	H28 年度
分娩件数	346	366	340	370	335
自然分娩	205	245	250	259	217
帝王切開	135	104	80	90	100
その他	6	17	10	21	18

【出典：高山赤十字病院調】

⑨小児医療

飛騨圏域において小児入院ができる唯一の医療機関であり、小児救急医療拠点病院に指定されている。入院患者数はほぼ横ばいであるが、少子化の影響もあり外来患者数は徐々に減少している。一方で、救急外来における小児患者は増加しており、1次医療から3次医療まで担っている状況である。また、予防接種等の普及により、重症化する入院患者は減少しているが、アレルギーや発達障害などの複合的な背景の患者が多く、今後は健康管理を含めた医療活動を実施していく必要がある。

■当院における小児患者の推移

（単位：人）

	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	H28 年度
入院患者数	725	766	714	742	749
外来患者数	3,607	4,278	3,110	2,615	2,549
救急外来受診	3,787	4,160	4,189	4,355	4,386

【出典：高山赤十字病院調】

3 自施設の課題

(1) 実行計画の策定と今後の当院の目指す方向

「ふるさとを守る医療」を病院のビジョンとして掲げ、地域医療の確保、医療の質向上、経営の健全化を基本方針として、第一次中期計画（平成 27 年度から平成 29 年度）を策定している。第 7 期医療計画、第 7 期介護保険事業計画及び公的医療機関等 2025 プランが始動する平成 30 年度においては、第二次中期計画の策定が必要になることから、整合性がとれた形で、具体性のある実行可能な計画を策定しなければならない。

飛騨圏域の住民、医療機関及び介護保険事業所等から、高山赤十字病院が求められている様々な役割を十分に理解し、圏域の医療体制を維持していく方針である。一方で、病院の老朽化もあり、新病院建築に向けた準備を行うなかで、地域医療構想を踏まえた適正な病床数及び医療機能を合わせて検討していく必要がある。

また、地域医療構想に示されるように、圏域における高度急性期機能及び回復期機能が不足している状況を踏まえ、急性期機能のあり方を検討する一方、高度急性期または回復期機能への病床転換も視野に検討する必要がある。

(2) 人材確保における課題

圏域におけるほぼ全ての「急性期の医療」かつ 5 疾病 5 事業等の「多機能の医療」を維持していくうえでは、地域的なハンディから慢性的な医師不足という課題がある。医師確保が重要であり、安定的な医師の確保体制の構築が喫緊の課題である。

さらに、現在の機能及び医療水準を維持していくためには、医師以外の医療従事者の確保も必要である。また、現在従事する職員の年齢層も高いことから、経営基盤の安定化と医療従事者の安定的な確保体制の構築が必要である。

(3) 地域包括ケアシステムの対応

入院患者の大半が高齢者であり、自宅へ退院する患者も多いことから、在宅医療を見据えた医療の提供が必要であり、圏域の医療機関や介護保険事業所との連携を密に行い、地域包括ケアシステムの構築に資する活動を行う必要がある。

IV 今後の方針

1 地域において今後担うべき役割

飛騨圏域における医療の最後の砦となるべく、救命救急、災害拠点、がん拠点、周産期、小児救急等の政策医療体制を確保し、現状の高度急性期及び急性期機能を維持する。

急性期治療後の患者を円滑に在宅医療・療養に移行できるように回復期機能を有効に活用し、地域包括ケアシステムの一翼を担う。

2 今後持つべき病床機能

高度急性期機能が不足している現状から、救急医療を見直し、HCU や NICU の体制を充実することも検討する。

急性期機能の病棟における規模の適正化について検討を行う一方で、回復期機能の病棟においてサブアキュート機能の検討をする。

3 その他見直すべき点

既存の病院の老朽化に伴い、新病院建設を視野に検討する必要があるなかで、現在休床中の病床を含めた適正な病床数の検討を行う必要がある。

V 具体的な計画

1 4 機能ごとの病床のあり方について

現状の医療機能を維持し、地域医療構想における役割を確保するとともに、今後の地域の医療需要を加味した医療機能について検討を重ねる。また、新病院建設に向けて、休床中の病床の扱いも含め、適正な病床機能及び病床数を検討していく。

(単位：床)

	現在 (平成 28 年度病床機能報告)		将来 (2025 年度)
高度急性期	16	→	70
急性期	353		200
回復期	107		150
慢性期	0		0
(合計)	476		420

注)：将来については、現在の病床機能報告制度のように、病棟単位かつ入院基本料等による報告ではなく、平成 28 年度における医療資源投入量の患者割合をもとに病床稼働率 90%の目標値にて推計している。また、記載している 2025 年における病床数は、当院の医療機能を堅持していくことや圏域内における他医療機関の急性期機能の維持・存続等を念頭に余裕を持たせた数値であり、今後こういったコンセプトをもとに、新病院建築に向けた検討を行うための大枠の数値である。

< 年次スケジュール >

	取組内容	到達目標	(参考) 関連施策等
2017 年度	○2025 プラン策定 ○第二次中期計画策定	・地域医療構想を踏まえた当院の果たすべき役割の明確化 ・経営指標に係る数値目標の設定 ・経営改善と健全化	
2018 年度	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="writing-mode: vertical-rl; margin-bottom: 10px;">2025 プラン</div> <div style="writing-mode: vertical-rl; margin-bottom: 10px;">第一次中期計画</div> <div style="writing-mode: vertical-rl;">第三次中期計画</div> </div>	・地域医療構想を踏まえた医療機能の見直しと新病院建築に向けた基本構想の策定 ・経営の黒字化	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="writing-mode: vertical-rl; margin-bottom: 10px;">第7期医療計画</div> <div style="writing-mode: vertical-rl; margin-bottom: 10px;">第7期介護保険事業計画</div> <div style="writing-mode: vertical-rl;">第8期</div> </div>
2019～ 2020 年度		・病床機能の転換に向けた検討と決定 ・新病院建築に向けた基本構想の決定と設計構想の策定 ・経営の安定化	
2021～ 2023 年度		・改革期間を通じ、同様の取り組みを実施	

2 診療科の見直しについて

地域医療構想をベースに地域の医療ニーズを踏まえて、随時見直していく

3 その他の数値目標について

項目名	数値目標	実績値（平成 28 年度）
病床稼働率	90.0%	78.9%
手術稼働率	142.0%	122.9%
紹介率	70.0%	68.2%
逆紹介率	70.0%	73.1%
人件費率	49.6%	52.2%
医業収益に占める人材育成に かける費用の割合	0.53%	0.53%

注：病床稼働率…(入院患者延数)÷(病床稼働数×365日)

注：手術室稼働率…(手術室で行った手術件数)÷(手術室×365日) ※稼働手術室6室

注：人件費率…(給与費÷収益的収入)

注：医業収益に占める人材育成にける費用の割合…(研究研修費÷医業収益)

VI その他

1 研修医のマッチング状況

当院は、昭和 56 年 2 月に臨床研修病院に指定され、以後多数の研修医を受け入れている。高度急性期から急性期疾患、慢性疾患、高齢者・終末期医療までの一貫した研修体制を整備し研修医の確保に努めており、マッチング者は増加している。

■当院における研修医のマッチング状況

(単位：人)

	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	H28 年度
マッチング定員	6	6	7	8	8
マッチング者	5	6	6	7	6
自治医科大学者	1	1	1	0	1
採用人数	6	7	7	7	7

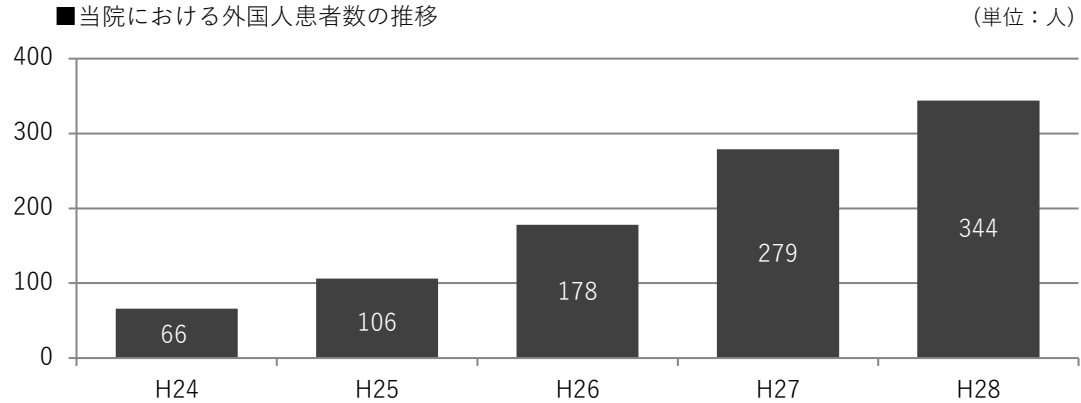
【出典：高山赤十字病院調】

2 外国人修練医師の受け入れ

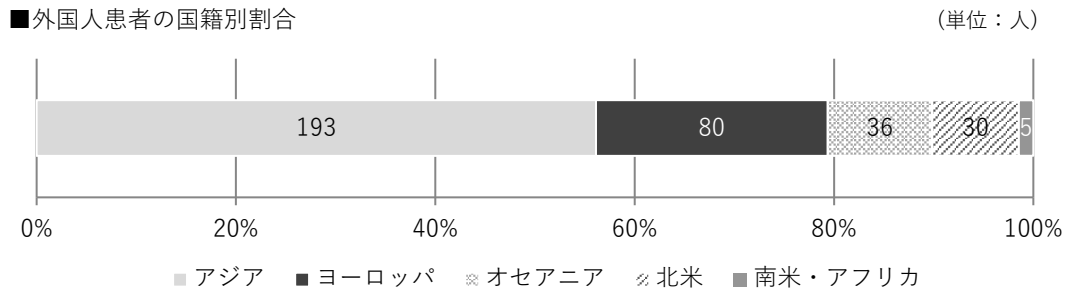
当院は、昭和 63 年 3 月に外国人医師修練病院に指定され、現在指導医は 3 名在籍している。平成 27 年度年から平成 29 年度において、3 名の中国人医師（消化器科、脳神経外科、小児科）の受け入れを行い、病院の活性化及び外国人患者への対応にも貢献している。

3 外国人患者の医療体制の整備

昨今、自治体による積極的な外国人観光客の誘客に伴い、外国人患者の増加が著しく、その国籍も多様化している。外国人患者への医療は特別なものではなく、日々の医療の向上にもつながることから、外国人診療体制を整備し、多職種によるチーム医療を実践している。



【出典：高山赤十字病院調べ】



【出典：高山赤十字病院調べ】

4 国際救援事業の実施

国内の災害救護だけでなく、海外の災害救援や保健衛生向のために医師を派遣し、国際貢献にも努めている。

■ 国際救援事業の派遣実績

事業名	派遣国	派遣医師	派遣期間
ハイチ大地震災害救援事業	ハイチ	白子順子	平成 22 年 2 月 21 日 ~ 3 月 28 日
ウガンダ北部地区病院支援事業	ウガンダ	白子隆志	平成 22 年 4 月 24 日 ~ 5 月 30 日
パキスタン洪水災害救援事業	パキスタン	白子順子	平成 22 年 10 月 1 日 ~ 10 月 26 日
ハイチ大地震被災者支援事業	ハイチ	白子順子	平成 23 年 3 月 14 日 ~ 4 月 17 日
ウガンダ北部地区病院支援事業	ウガンダ	白子隆志	平成 23 年 4 月 27 日 ~ 5 月 30 日
ウガンダ北部地区病院支援事業	ウガンダ	沖一匡	平成 26 年 4 月 18 日 ~ 8 月 31 日
中東地域紛争犠牲者支援事業	ギリシャ	白子順子	平成 28 年 5 月 18 日 ~ 6 月 16 日

5 高山赤十字病院介護老人保健施設との連携

当院の付帯施設である介護老人保健施設はなさとの利用者数は増加傾向であり、病院との連携を促進し、急性期後における患者の在宅復帰等を支援する役割を担っている。

■介護老人保健施設はなさとの入所者等の推移 (単位：人)

	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	H28 年度
新入所者数	799	760	916	919	942
入所者延数	31,676	30,756	31,029	29,539	30,027
通所者延数	6,695	6,957	7,309	7,196	7,095

【出典：高山赤十字病院統計より】

6 看護体制及び教育

質の高い看護を提供するため、赤十字理念に基づく看護体制及び教育を実践している。看護の質を維持・向上するため、認定看護師によるチーム医療及び地域連携を推進している。新規採用職員においても、研修や教育を積極的に行い、ラダーに基づく研修体制を構築している。また、全国の赤十字病院における横断的な連携により、人事交流や情報交換を行い、医療の質向上に努めている。

■認定看護師資格取得者数（平成 28 年度）

認定看護管理者（2）、皮膚排泄ケア（3）、緩和ケア（1）、摂食嚥下障害（1）、認知症看護（1）、感染管理（1）、がん化学療法（2）、糖尿病看護（1）、集中ケア（1）、救急看護（1）

7 入退院サポートセンターの開設

平成 28 年度より入退院支援の機能を一元化し、患者へのサポート体制を充実させるため、入退院サポートセンターを開設した。看護師、社会福祉士及び薬剤師等による多職種連携により、入院早期から退院後を見据えた支援を行っている。また、地域における医療機関や介護保険事業所等との意見交換等を実施し、地域包括ケアシステムを実践する組織体制を構築している。

8 市民公開講座の開催

地域医療支援病院として、地域住民に対して医療や介護への関心を高めるため、市民への啓発活動を目的とした研修会や講演会を開催している。

9 赤十字講習等の実施

幼児安全法、救急指導法、健康生活支援法等の講習会を開催し、日常生活における安全や予防に役立てるように地域住民を対象とした活動を実施している。

10 母乳育児推進活動

地域と協働して母乳育児を推進することで、周産期における医療及びケアの質の向上を図るとともに、虐待予防やコミュニティづくりを目的に活動を実施している。